

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アフリカを対象にした環境史研究の動向：イギリス保護領ベチュアナランドの社会史

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009609

アフリカを対象にした環境史研究の動向

— イギリス保護領ベチュアナランドの社会史 —

池谷和信

一 環境史と歴史生態学

近年、文化人類学において、環境史に関する関心が高まっている。その背景には、次のような2点が挙げられる。

まず、かつての文化人類学では、現存する社会には変化しがたい固有の本質があり、それが過去の復元につながると想定する本質主義の立場に立っていた。しかし、一九八〇年代以降、文化人類学では歴史への関心が高まるとともに、近代人類学の本質主義に対する批判が行われるようになった⁽¹⁾。その結果、人類の基本的な生計活動である狩猟・採集や牧畜・焼畑などに依存する社会を主な対象としている生態人類学において、とりわけ環境史への関心が高くなっている。

例えば、筆者がこれまで研究してきた南部アフリカの狩猟採集民サン(ブッシュマン)を対象にした人類学的研究においては、一九八〇年代終わりから現在に至るまで『カラハリ論争』と呼ばれる論議が知られている。これは、サンが前の時代の生き残りであるともみならず「伝統主義者」と、彼らはヨーロッパ人とバンツー系農牧民によって支配された大きな政治経済システムのなかで辺地に住み、社会的に下位に位置する存在であるとみなす「修正主義者」とのあいだの論議である。現在、このような問題意識をふまえて、植民地時

代におけるサンの社会史・環境史研究が盛んになっている⁽²⁾。

もうひとつの背景としては、文化人類学における地球環境問題に対する関心の高まりが挙げられる。近年、わが国において環境問題を文化人類学的に研究する分野として環境人類学が提唱されている⁽³⁾。またその解明には、文化生態学、歴史生態学、政治生態学の3つの生態学の視角が有効であるとされる。なかでも歴史生態学のそれは、人間と環境との関係を歴史的視点から把握するもので、本稿で対象とする環境史とほぼ同じ内容を意味している。

さて、環境史とは、ある特定の時間において人間がどのように自然資源を利用し管理してきたのかを明らかにする分野である⁽⁴⁾。環境史の中心的対象である木、岩、病気、気候などの自然資源は、単なる社会史の背景としてではなく本質的なものとして重要な部分を占める。これまで環境史は歴史学の一分野であるのか、学際的な領域であるのかをめぐる論議が続いてきた。

この研究では、近年のアフリカ(以下、サハラ以南アフリカを意味する)を対象にした環境史研究の動向を簡単に展望したうえで、現在、筆者がすすめているイギリス保護領ベチュアナランド(現在のボツワナ)の環境史・社会史研究を報告することを目的とする⁽⁵⁾。筆者は、口頭伝承を収集する現地調査と同時に、ボツワナ政府の国

立文書館での資料収集を行った。そして、降水量変動にともなう旱魃、バッタの到来、天然痘への住民の対応などの実態の解明には文書と口頭伝承との両面から把握するよう試みた。

二 アフリカを対象にした環境史研究の動向

筆者は、アフリカを対象にした環境史研究を展望して、次のような3期に時代区分をする。第1期は、一九七七年～一九九五年の間である。この時代には、環境史という用語は使われていないが、東アフリカを中心的な対象にして歴史学者による環境史研究は行われていた。

まず、人によって管理される生態システムが経済発展の基礎にあるという考えのもとに、一八五〇～一九五〇年のタンガニカを事例に生態学的管理と経済発展に関する歴史的变化が扱われている⁽⁶⁾。ここでは、植民地時代の政治経済的側面に深くかかわる牛疫の勃発や野生動物の保護政策など、従来の研究では軽視されていた側面に焦点がおかれている。

イギリス植民地北ローデシア（現在のザンビア）東部では、資本主義の浸透や植民地管理がすんだ結果、土壌浸食や森林破壊、およびツエツエフライや眠り病の導入など生態学的な問題が引き起こされた⁽⁷⁾。農民はもともと肥沃な土地に暮らしていたのであるが、植民地時代の終わりには貧困化していく過程が実証されている。

一九八〇年代になると、イギリスの歴史学者アンダーソンらを中心に、アフリカの資源管理と保護政策に関する学際的な研究（『Conservation in Africa』所収）が早くも行われた。彼の研究によると、東アフリカのイギリス植民地では、一九三〇年代になると、

農業生産の向上を求める動きを背景として、アフリカ人による農業生産の方法などへの関心が高まってきたという⁽⁸⁾。しかし、過剰生産にともなう土壌侵食などが、アフリカの土地への生産力に威圧を与えてきた。このため、植民地での自然資源の保護が重要な関心事になった。彼は、一九三〇年代における植民地政府と土壌保護との関係に焦点を当てた研究をしている。その過程で、一九三八年以前では、ロンドンの植民府および東アフリカの行政官とも、アフリカの農民や牧民の家畜飼育に直接介入する政策であったものの、一九三〇年代に植民者の思考のなかに間接統治の原理が新たに生まれてきたことを見出し出している。

それに加えて、彼らは、歴史学者を中心にして人類学者、生物学者などが参加し、野生動物の管理や土壌保護などに関与する社会的側面を広く扱う研究をすすめた⁽⁹⁾。アンダーソンは、ケニアの植民地時代における森林管理と保護、共編者のグループは一九世紀のケニア地方におけるアフリカ人の保護の考え方に焦点を当てている。両者とも共通して、生物種や環境の保護を考えるには、そこに暮らすアフリカ人社会とのつながりを見る必要がある点が指摘される。

ほぼ同じ時期に南部アフリカにおいても、植民地時代の土壌浸食の状況、その原因、イギリス植民府の対応が研究テーマに選ばれている。イギリス植民地レソトの土壌侵食は、もともとソト族の原始的な農法や過放牧が原因であるといわれていたが、意外とその事実の裏づけがないことが明らかにされる。植民地府は、二〇世紀のはじめに灌漑の可能性を述べた報告の中で土壌侵食に言及して以来、調査を実施していないが強い関心を持ってきた歴史が概観され、ソト族の活動への否定的な見方が修正される⁽¹⁰⁾。

第二期は、一九九六年～一九九九年の期間である。この時代には、歴史学の隣接分野である文化人類学や人文地理学からの環境史研究が生まれている。この時期は、自然景観に作用してきた人間活動の歴史が復元された結果、「環境見直し論」という新たなパラダイムが生まれている点に特徴を持つ。ここでは、現在の世界の熱帯林は、原生的な状態で残っているようにみえても、実は何世紀にもわたる自然と人為の相互作用の結果として変えられてきたものが多いとされた⁽¹¹⁾。具体的には、森林・サバンナ⁽¹²⁾、熱帯林⁽¹³⁾、有用樹の形成⁽¹⁴⁾などサハラ以南アフリカの多様な植生に対応して、いずれもアフリカ人の主体的活動の復元とその評価をしている。

西アフリカのギニア・サバンナにおけるサバンナと森林の歴史に関して、これまでは人間活動によって森林が消失して森林はサバンナのなかにパッチ状に残存してきたという見方であった。これに対して、フェアーヘッドらは森林景観を復元することから農民の活動はむしろ森林被覆を増大させているということを示した⁽¹⁵⁾。その手法としては、一九五二年と一九九一年の航空写真や一九八九年と一九九二年の衛星画像などを景観復元に利用している。一方、同様の地域を対象にして、航空写真、衛星画像、GIS（地理情報システム）を使うことから、上述の事例はギニア・サバンナのなかで特殊なものであり一般化するには問題があると批判されている⁽¹⁶⁾。

同様に、アフリカ中部のコンゴ東部におけるイトウリの森を対象にして、ムブティピグミーの人類学的調査と衛星画像の手法を併用することを通して、彼らの森林資源利用は森の再生産に大きく貢献していることが実証的に見い出されている⁽¹⁷⁾。エチオピア西南部の森林地域のマジャンギルを対象にしても、人類学的調査と地理学の

ツールであるGISの技法を統合する視角から、過去二〇年以上にわたる彼らの森林の歴史的動態が把握される⁽¹⁸⁾。

さらに、南部アフリカにおいても人間活動の植生への作用として新たな研究成果が生まれている。一九世紀のナミビア北部のクワニャマ王国ではある固有の果実種が豊かであったといわれる。一九一〇年代の戦争や飢饉によって多くの人が立ち去った結果、それらの樹種が少なくなったのちに、アンゴラから移住民が定着するとその樹種の地域は拡大していったという。これは、上述したギニア・サバンナやイトウリの森による環境変化の事例とよく類似しており、人間活動が森林の形成に作用していたことを示すことはできない⁽¹⁹⁾。

第三期は、二〇〇〇年代に当たる。この時期には、環境史研究という名前のもとに多彩なテーマと方法が含まれている論文集や展望論文が生まれたことで、この分野の研究が確立してきたことが示される。

まず、オックスフォード大学のウィリアム・バイナートが、初めてこれまでのアフリカを対象にした環境史研究を幅広く展望している⁽²⁰⁾。その主な内容は、植民地政策や植民者の侵入と野生動物や森林などの環境荒廃及びツェツェフライ・眠り病の発生などの生態的問題との関係、資源管理の権利をめぐる政治的陳述と環境に関わる住民の伝統的知識と生計手段、植民地政府による環境政策への地域住民の抵抗運動など多岐にわたる。

アフリカ環境史のなかで最も研究蓄積のある南アフリカ研究では、『南アフリカの環境史―事例と比較―』⁽²¹⁾と題する論文集が刊行されている。本書は、南アフリカの環境史に関わる事例報告、および南アメリカやオーストラリア地域などとの比較という2部から構成

される。そこでは、南アフリカの環境史研究は、一九八七年に出版された上述の『Conservation in Africa』の影響を受けて、雑誌Journal of Southern African Studiesに南部アフリカの保護政策の特集が組まれたことで発展してきており、学際的な研究の重要性が指摘される。本書は、南アフリカに限定されているが、草地への火入れの役割、環境への白人植民者の影響など生態と政治と社会の関係を議論している。

近年に刊行された『社会史とアフリカの環境』⁽²⁾と題する論文集は、アフリカ人の環境観と実践、植民地科学・国家・アフリカ人の対応、植民者とアフリカ人という3部から構成され、現時点では最も包括的に最新の成果を提示している。この本では、環境管理に対するアフリカ人の戦略、保護に対する政策やアフリカ人の抵抗など環境史のなかでの社会・文化的側面を發展させている。また、アフリカ人、植民地行政官、植民者、科学者のあいだの關係に新たな光を当てている。さらに、神話や伝説、語り、景観認識など対象を拡大すると同時に、古文書調査、口頭伝承などの従来の方法に加えて、新たに写真類の利用をしている点もみのがせない。

本書では、近年のアフリカの環境史研究に関わる新たな枠組みをまとめていく点も特徴である。これまで、アフリカの野生動物、森林、放牧地、水などのアフリカの自然資源の歴史的变化は、種の絶滅、森林崩壊、土壌浸食などにみられるようにネガティブな環境変化としてとらえられてきた。これに対して、環境崩壊の多くは植民者の介入によって引き起こされたのであって、アフリカ農民は自然との關係をうまく対処してきたといわれる。また、これまでの見方では、放牧地への人の利用を規制するような政策が求められてきた

が、実際に家畜による放牧地の利用を規制することは難しい。その理由としては、放牧地の価値や豊かさをつくる気候や降水量などを予測できないからであるという。

以上のように、アフリカを対象にした環境史研究を展望すると、一九七〇年代から一九九〇年代前半の「創設期」、一九九〇年代後半における人類学や地理学を中心とした隣接分野の「参入期」、そして二〇〇〇年代の「確立期」という3つの時期に分けてまとめることができる。

三 イギリス保護領ベチアナランドの環境史と社会史

ここでは、前章で述べてきた環境史研究の展望をふまえて、南部アフリカのイギリス保護領ベチアナランドを対象にした具体的な事例を示す。

さて、一八八五年に、イギリス保護領ベチアナランドが現在のボツワナに対応する地域に成立した。この領内は、植民地時代以前に成立していた首長国の首長の権利が認められているネイティブ・リザーブ、イギリスが直接統治する王室直屬領（クラウンランド）、ヨーロッパ人保有地とに三分割されている（図1）。

筆者は、これまでベチアナランドの中央部を対象にして、主として王室直屬領での社会史の復元を研究してきた⁽³⁾。その結果としては、毛皮交易をめぐるサン（ガナとグウィイから構成）とカラハリ（バンツィ系の農牧民）との關係の社会経済的变化から、次の5つの時期の特徴が明らかにされた。第一はマウンやモレポロール方面から対象地域へのカラハリの流入のあとに、カラハリが対象地域内のツウーシからカオチュエやコウトウへの移住にともないサンとの

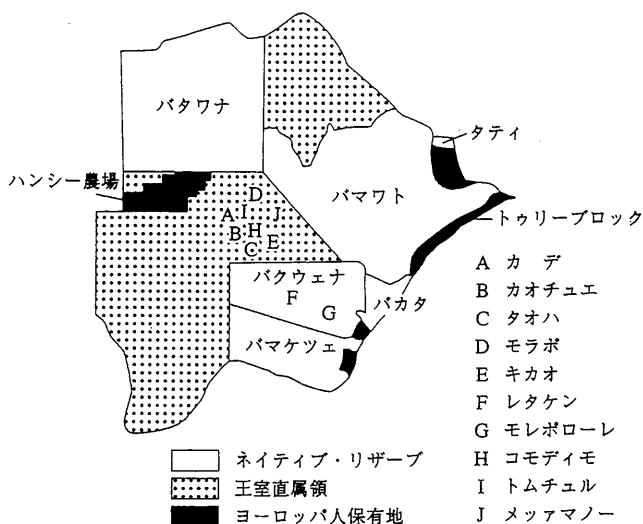


図1 イギリス植民地ベチユアナランド(1885~1966年)の土地所有形態
 カオチュエとコモディモの位置は、カオチュエ バン 22°30'S, 23°15'E,
 コモディモ バン 22°30'S, 23°45'E [HILL, J. E. 1942: 370] を参照。
 また、カオチュエからオクワ リバーまでは28マイル (約44.8 km),
 コモディモ バンまでは38マイル (約60.8 km) の距離となっている。

社会経済関係を形成した時期、第二は一九三〇年から一九四〇年代にかけて徴税システムがなくなりバンドの配置が変化するがサンとカラハリ関係の継続する時期、第三は一九五一年の天然痘の流行や農場への労働力移動によって対象地域内の人口の減少が生じて両者の関係が崩壊する時期、第四は一九六一年の政府による中央カラハリ動物保護区の指定以降に、カラハリのサンへの同化が進む時期、第五は民芸品の生産のために再び毛皮の商品的価値の増加した時期である。そして、このなかで毛皮生産は常に実施されてきているが、それが商業的色彩を帯びるのは、第二と第五の時期であることが明らかにされた⁽⁶⁴⁾。

(1) 社会史復元のための方法

本稿では、ベチユアナランドの環境史・社会史研究の一環として、対象地内に広がる地名をてがかりにして⁽⁶⁵⁾、出来事や生活史を集めることを通して、ベチユアナランド中央部において狩猟採集民として知られるサンの移動空間を復元する。彼らは、本拠地を持たずにある範囲の地域で移動生活を送っていたといわれる。彼らの生活の基本は家族であり、家族の集合としてはバンドが構成される。

まず、サンのあいだで共有されている出生地、婚姻の場所、子供の出生地、死亡地などの場所に関する情報を収集する。これらは、複数の人が知っている知識なので、聞きとりを通して情報の信頼度を高めることができる。しかし、人々は自分の年齢を認知していないために、それらの相対年代はわかるが絶対年代は不明のままである。次に、多くの人々のあいだで共有されている出来事を集め、古文書資料を併用することで、おおよその年代の把握につとめる。最後に、各々の出来事が生じた際の人々の滞在地を推定して、より多くの移動先を地図化することで可能となる移動空間を把握する。

ここで、人々の間で共有している出来事を抽出する際には、世代や集団ごとに共有している情報が異なることに注意しなくてはならない。筆者は、世代の異なる現地の人々からの聞きとりを通して、以下のような①から⑥にわたる6種類の出来事を抽出して時代区分を行った⁽⁶⁶⁾。これらは、キャンプ集団をこえて多くの人が知っている出来事であるため、複数の人からの聞きとり結果を比較することで、より信頼度の高いものになっているとみなされる。①一九三〇年頃のケイギョム氏の死亡、②一九五〇年頃の天然痘の流行、③ス

カラブー氏の死亡、④一九五九年の植民地行政官シルバールバウアーのカオチュエへの訪問、⑤一九六四年のシルバールバウアーによるカラハリ所有のロバの殺害、⑥一九六五年頃のギュロー氏の死亡。なお、①、③、⑥の人名は、それぞれカデ、トムチュル、カオチュエにおけるカラハリのチーフを示す。

上述の年代は、古文書資料や聞きとり調査の検討をとおして、次のように確定したものである。①のカラハリのケイギョム氏が死亡した年代は、赤色バツタ⁽⁷⁾の大量の訪問と一致しているために一九三〇年頃とみなされる。天然痘の流行した年代を確定するために、一地方行政官から地方弁務官へ一九五一年三月三〇日に提出された「カラハリ県の天然痘」というテーマの行政文書を利用する⁽⁸⁾。このなかで、モイカンゴア (Mokangoa) 博士がバクウェナ・リザールのカンから二〇マイル東にいったツェツェン (Tsetse) において、天然痘によって六〇人が、カンでは六人が死亡して、すべての住民はワクチン接種をうけたと報告している。また、一九五〇年から一九五一年にかけて、ツェツェンに近い対象地の住人のなかで大きな天然痘が勃発した結果、多くの人々が対象地から立ち去ったといわれることから⁽⁹⁾、②の出来事は一九五〇年から一九五一年までに生じたことと判断することができる。③は、②と④の間に起きていることはわかるが、年代を確定できない。

④の植民地行政官シルバールバウアーのカオチュエへの訪問の年代を確定することは容易である。古文書資料により、一九五九年八月一七日から二四日の間である⁽¹⁰⁾。⑤の年代を確定するために、シルバールバウアーによってロバが殺害されたカラハリ(ツェツェン在住のケーシ氏)への聞きとり調査によると、一九六四年にタラホガエ

にて数頭のロバが銃で殺されたという。⑥のギュローの死亡は、⑤の後で田中二郎氏による一九六七年の第一回目の訪問以前ということから、一九六五年か一九六六年とみなすことができる。

筆者は、対象地内のカデの人々から生活史を収集した。彼らが、①から⑥の出来事を知っているか否かで、七〇代、六〇代、五〇代、四〇代の四つの階層に年齢層を区分できる。例えば、①以降の出来事を知るのは七〇代の人々で、調査地には一〇人以下しかいない。②以降の出来事を知るのは六〇代の人である。③以降のものは五〇代の人々に当たる。

(2) 年降水量の変動

遊動キャンプを基点としていた時代の居住地移動は、年降水量の多少に大きく左右されていると推察される。対象地域内での年降水量の長期的年変動を把握する資料がないので、カデから約一八〇kmの北西に位置するハンシーでの観測資料を使う。図2は、一九二三年から一九九二年までのハンシーの年降水量の変動を示す。この図より、二〇〇ミリ前後から八〇〇ミリ前後までと、年降水量の変動が大きいことがわかる。これから、二〇〇ミリから四〇〇ミリの少雨、四〇〇ミリから六〇〇ミリの平均的降雨、六〇〇ミリから八〇〇ミリの多雨の3分類できる。

例えば、対象地内を縦断したクリフォードの探検は一九二八年の雨量が四三〇ミリで平年の年に、ヴェルナイ・ランの探検は一九三〇年の雨量が四二〇ミリで平年の年に、シルバールバウアーの予備調査(上述の④の出来事)は一九五九年の雨量が二二八ミリで少雨の年に、田中二郎氏の第一回目の調査は一九六七年の雨量が六二九ミ

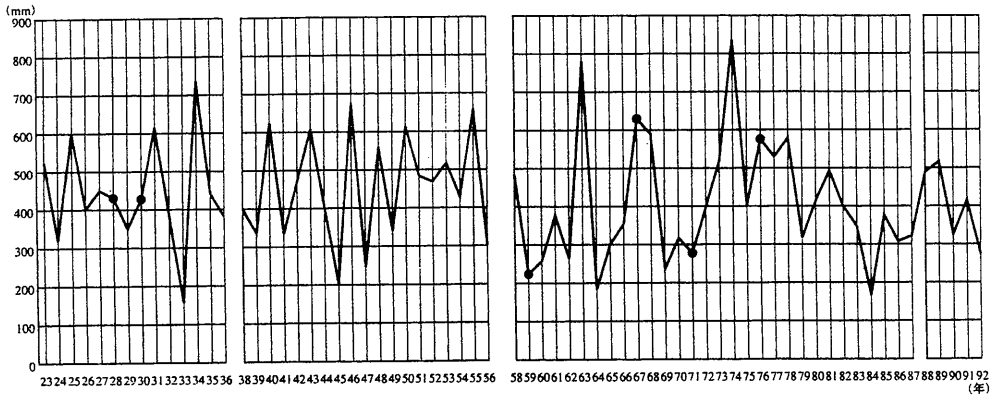


図2 1923~1992年のハンシーの年降水量(単位:mm)

ボツワナの気象庁の資料から。1928年にClifordの探検, 1930年にVernay-Langの探検, 1959年にSiberbauerの予備調査, 1967年と1971年に田中二郎の調査が実施されている。なお, 中央カラハリ動物保護区(リザーブ)は1961年に成立している。

りで多雨の年に、第二回目の調査は一九七一年の雨量が二八三ミリで少雨の年に実施されてきた。そして、ジェファーズらの調査が実施された一九七六年の雨量は五七九・二ミリを示し、平年の年となっている。こうした降水量の年変動が、対象地内のキャンプの移動形態を大きく左右している可能性がある。

四 ベチュアナランド中央部における居住地移動の分類

(1) 移動先の違いによる分類

サン

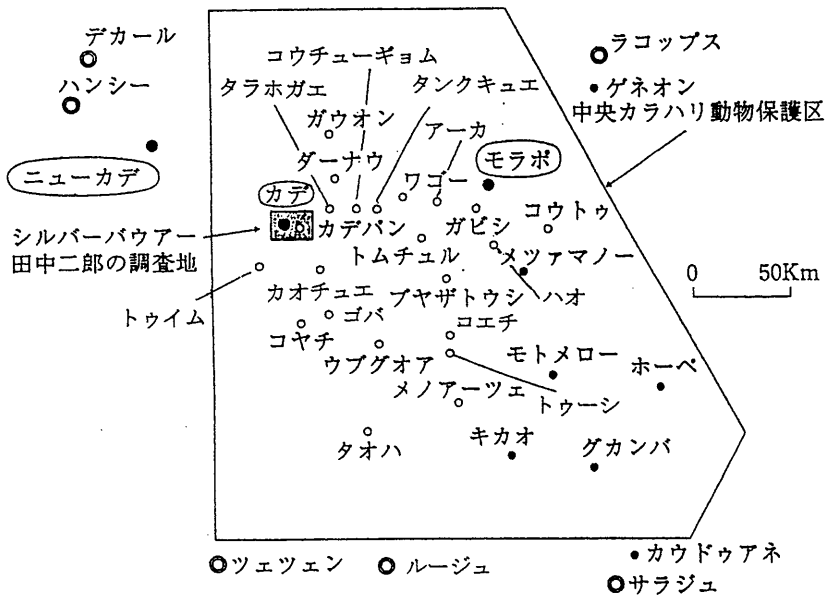


図3 ベチュアナランド中央部における地名 筆者の調査による。

動は、移動先の違いから3つのタイプに代表される。まず、最も頻繁にみられるものは、対象地内から近隣村への移動タイプである。次に、対象地に比較的近いアフリカーナーの経営する農場への移動タイプである。最後は、南アフリカの鉱山への移動タイプである。

〔井戸のある近隣村への移動タイプ〕

トムチュルの事例、【事例1】情報提供者、ガナのヌアーヤ（男性、六〇歳代）

私は、①の出来事を知らない。タンクキューエに生まれる（図3参照）。そのとき父のレコワは生きているが、祖父のケイギョムは死亡している。その後、トムチュルへ移動する。ここでは、トゥエローがランチョナ（モラポ在住のシエホクエの妹）と結婚するが、彼女はガビシにて死亡する。ウワゴーにて、カウディセラが生まれる。

独身の時に、ロバを持たないのでステインボックスの毛皮を運搬用ネットに入れて、ガウオンからラコップスの近くのゲネオンへ行く（図3参照）。テヤマクエの父やチアマの父もいっしょである。ラコップスの近郊では葉タバコを購入して、ゲネオンではモラポ在住のカイニョンの牛が飼養されていた。モラポからのコウサマがその牛の世話をしていた。そのあとガウオンにもどり、さらに雨期にはトムチュルにもどる。

②私は、グウィのコリーと結婚していたが、子供はいなかった。彼女は、タオハ在住のコウピの妹の子供であるが、ハオにて天然痘で死亡する（図3参照）。彼女がタオハ（多くの人々は、ルージュの村へ移動）からトムチュルへ移動してきた際に出会って結婚する。

③スカラブーは、自分のロバに水を飲ませるためにツェツェンに移動して死亡する。当時、トムチュル（ソオマコも在住）には野生スイカがあまりなかったが、私とダオヌアはトムチュルに残る。スカラブーが死亡の年に、私は、冬にトムチュルからドウカレやタマハナなどのデカール農場へ行き、雨期にはトムチュルに帰る。妻のジョーバや息子のダオゴーもいっしょである。このとき、妹のこい

クエは農場に残ったままとなり、そこでナロー（サン）の言語集団の（一）の男性と結婚する。

その後、野生スイカを捜して、ブヤザトウシに着く。そこには、幼少のツェウオリやナレコワホがいる。彼女の母ガエガエは、ライオンに殺されていた。このとき、スカラブーのすべてのヤギが、ライオンやハイエナによって死亡する。トゥエローから、父のスカラブーの死を聞いて父の物をとりにツェツェンへ行くというので、ヤギの世話をしてくれといわれた。ブヤザトウシにて、長女のタピシヨが生まれる。しかし、トゥーシの近くのコエチにて死亡する。その後、雨期になってくぼ地に水がたまったのでトムチュルに帰る。

④アーカへ移動して、第2子（次男）のマーホが生まれる（図3参照）。このあと、ツェーテベラといっしょに、野生スイカを求めてメツアマノーへ移動する。そのあとシルバーバウアーが来る。（ダオグーは、ドウカレの農場へ行っていた）。シルバーバウアーは、トワクワ、コアやギュローと会う。私は彼とカデに住んだときは、彼はヤギをいやるので、トムチュルやタラホガエにヤギを置いていた。当時、シルバーバウアーは犬もきらいであったが、私はソオマコが与えたコノーという名の雄犬、ダオヌアは一〇枚のステインボックスの皮でクウカから交換して得たツェタナという名の雌犬を所有する。彼は、ソオマコとクウカがモラポからメツアマノーに来たときに、その犬を入手している。

私は、シルバーバウアーがカデに滞在中に、ヤギを所有する。これは、ツェツェンのカラハリのコナーからロバとの交換で得た物である。ロバは、ハンシーの農場で入手した。モラポ在住のコボウの父（ハウラペロ）にチータの毛皮を贈り物にするとヤギが与えられ

たり、モラポ在のカラネバのヤギを買ったときもある。

⑤ トウエローや私のロバは、殺されないで残る。当時、第3子(長女)のコバチヨウがコウチュウギョムにて出生していた(図3参照)。

⑥ 野生スイカがまったくなく、クリスマス頃にツェツェンへ移動する。ツェツェンではハーキヤ(パイペロの娘)が生まれ、ギューローが死亡する。私は、ここで三頭の羊を、ソオマコは一頭の羊を購入する。しかし、これらは夏に死亡したので、食べてしまう。羊は、牧夫なしで放牧すると遠くへ行ってしまうので好ましくないという。

そのあとカオチュエに移動する。その年の冬に田中が訪れて、いっしょにカルー、キュメイ、タラホガエ、カデへと動く。そして、田中が帰国すると、パイペロがカデにある井戸のポンプ係になる。そのあとモラポへ移動するが、ダオグーとダオナンは農場へ行く。その後、ギョンが、水を供給するために人々を捜しに来たので、多くの人がカデへ移動する。しかし、ソオマコはトムチュルに、キエマはカオチュエに残る。

以上のように、ヌアーヤは、彼が移動生活を送っていたバンドのテリトリー内のタンクキュエで出生し(図3参照)、トムチュルで結婚をするが、妻は天然痘で死亡する。その後、再婚して長女をもうけるが、長女はコエチにて死亡する。第二子は、アーカで生まれる。第三子はコウチュウギョムにて出生する。ヌアーヤの居住地移動は、少雨の年には、ツェツェンの村やデカールの農場へ向かう場合と、リザーブ内のメツアマノーやハオなどを移動空間としている

近隣集団の地域に出向く場合とに分けられる。また、各々の出来事に出くわした地名を結びつけると、ヌアーヤの居住地移動の歴史を地図化することができる。②、③、④、⑥の出来事は、彼らが日常的に移動するバンドのテリトリー外で起こっている。また、これら4つのものは、水を確保しにくい少雨の年に生じた出来事という共通性を見いだすことができる。

〔農場への移動タイプ〕

カデの事例、【事例2】情報提供者、グウィのカエギユウ(男性、七〇歳代)

① ケイギョムの子供のシエマは、ダーナウに生まれる。自分は独身でケイギョムが生きているとき、雨季にバツタが来る。人々はバツタを食べつくし、バツタがいなくなった同一の年の雨季に、ケイギョムが死亡する。バツタは、四月に子供をつくり、冬をすごし、夏に死亡する。ケイギョムが死亡した翌年も、二年つづけてバツタが来るが、三年目は来なかったという。バツタはダーナウにて栽培スイカのつるを採食する。人々は木の棒をおき、そのまわりの草地を火でもやす。すると火の煙に誘われて、木に止まったバツタが火の中に落ちる。また、私の父親のアバノーはケイギョムの命令で牛車を買った際にモラポローレで死亡する。

② 天然痘が流行した年に、私はカオチュエにいた。ツェツェンからやってきた人が、天然痘が広まっていることを知らせる。スカラブーも少しかかったが、皮膚を切つてウミをとりだしたので死亡しないですむ。天然痘で死亡した人を穴には入れずに捨て去ったために、ハゲタカが死体の所にやって来ていた。私は、この病気以外に

水不足の影響もあり、デカール農場へ移動する。

【事例3】情報提供者、グウィのシエマ（女性、七〇歳代）

①父のケイギヨムがダーナウにて死亡した後、彼が所有する三頭のヤギをとりて農場へ行く。兄のテルーはカデへ、兄のレコワはトムチュルへ移動するなど、皆ばらばらになる。カエギユウやカムへ（ダオナンの父）はケイギヨムの牛を放牧していた。トバコウホが、搾乳をする。ケイギヨムは、背が高くて太くて一〇人の女性がいた。牛やヤギをもち、二つの大きな家をつくる。彼はヘッドマンであった。ケイギヨムは、二〇頭の牛がひく牛車を持っていた。ダーナウには、自分の子供のレコワ、テルー、チャマなどが住んでいた。そのとき、ヌアーヤ（事例1の情報提供者）は、生まれていない。ヌアーヤの母のヌロオは、レコワと結婚してヌアーヤを生む。

これら2つの事例から、カラハリのケイギヨムがカデとその周辺地域を管轄していたが、彼の死亡後に、子供らが分散してすみわけて居住するようになったことがわかる。また、天然痘で多くの人が死亡した直後にデカール農場へ移住しているように、伝染病の勃発が居住地移動の一つの有力な動機となっている。

〔鉱山への移動タイプ〕

カオチュエの事例、【事例4】情報提供者、グウィのツェケール（男性、六〇歳代）

私はカオチュエにて生まれる。①の出来事を知らない。②天然痘の時には、カオチュエの南のゴバにいた。ツェツェンを訪れて、天

然痘にかかった人を見る。私にも天然痘がうつり、少しのウミができたので、ゴバに帰る。トーパの父やホラリギョの妻は、天然痘で死亡する。③私が南アフリカのヨハネスブルクの金鉱山で、アヤコイらと働いているときに、スカラブーがツェツェンにて死亡したと聞く。このときには、シルバーバウアーは、まだカオチュエを訪れていない。その後、④シルバーバウアーがカオチュエに来たときには、飲水を求めてツェツェンへ訪れていたの彼には会っていない。降雨後に、ゼロノーにて、シルバーバウアーに出会う。⑤トウイムに居住していて、タラホガエを訪れた際に、ケーシの所有していたロバがシルバーバウアーに殺されるのを見ている。

また、この事例のほかに一九六〇年代終わりには、他のサンの人も南アフリカのヨハネスブルクの鉱山へ出稼ぎ労働には行っている。カデの3人の男性が、カンという町を訪れていたときに、鉱山に行けばお金が得られる話もちかけられて同意する。ヨハネスブルクの金鉱山では、地下の探索穴には行かずに地上での勤務である。その後、故郷が恋しくなり家族のための服や毛布を買うことができたので戻る。

これらの事例から、一九五〇年代から一九六〇年代にかけて、5名の男性の南アフリカの鉱山への移動がみられたことがわかる。また、少雨であった④の際に、飲み水を求めてツェツェンの村に移動している点と、事例1における野生スイカを求めて近隣のキャンプへ移動する点との対応の違いを指摘できる。

(2) 居住地移動と空間構造

これまでの4つの事例を並べて、出生地、婚姻の場所、子供の出生地、死亡地などを地図上にプロットすることを通して、サン居住地移動の範囲が明らかになる。その結果、その範囲はバンドのテリトリー内に完結するものではなく、テリトリーの外側の地名を見出すことが多かった。とりわけ、年降水量の少ない年には、約二〇〇〜三〇〇km離れた村や農場への移動が頻繁にみられた。これらは、遊動キャンプの時代において、村や農場の存在なしには調査対象地内のサンが自立した生活を送れないことを示している。

また、各々の出来事のおおよその年代が明らかになると、人々の移動ルートを年代別に地図化することができる。人々の移動空間は、三つの移動パターンの組み合わせから構成されるとまとめられる。第一は、バンドのテリトリーに対応するローカルな地域内での移動である。しかし、この移動には、毎年、雨期に農耕に従事するための本拠地の存在が見い出される。事例1のトムチュルや事例4のカオチュエが、そのよい例である。第二は、第一の地域に隣接する地域を含めての移動である。第三は、井戸のある近隣村やアフリカーナー経営の農場への長距離移動である。つまり、サンの居住地移動の空間は三重の構造から成り立ち、年降水量の変動が、これら三つの移動パターンの選択に大きく関与していると考えられる。このことは、遊動キャンプの成立を考える際に、町や農場は植民地時代に、村は植民地化以前に形成されたように、定住社会との歴史的な関与を無視できないことを示す。

五 まとめと展望―環境史を組み入れた社会史研究―

本研究では、近年のアフリカを対象にした環境史研究の動向を紹

介すると同時に、現在、筆者がすすめているイギリス保護領ベチュアナランドの環境史・社会史研究を報告することを目的とした。その結果、従来の環境史研究は3時代に区分して把握されること、筆者の研究は地名を手がかりにして出来事による年代を確定することから、地域住民の移動の歴史を復元する試みであった。そのなかで、ベチュアナランドにおけるパッタの大発生や天然痘の流行への住民の対応などを見い出すことができた。また、これらの結果は、降水量変動、人口減少、徴税システム、農場や鉱山への出稼ぎという諸現象の相互関係を把握するために、環境史を組み入れた社会史を復元するための試みであった。

前半の展望で述べたように、環境史研究は多様な方法の組み合わせによって展開してきた側面を持ち、環境史の中味はあまりにも多岐にわたる。環境史という言葉を使わない研究でも、環境史的研究を見い出すことができる。環境史という言葉の目新しさにとらわれずに、古文書の渉猟と現地調査という両面からの継続調査は不可欠である。それに加えて、過去の植生を復元するために航空写真や衛星画像の利用も有効であると思われるが、本稿の対象地と対象年代において該当する写真は見出せなかった。

筆者は、別稿ではイギリス保護領ベチュアナランドの社会史を復元するために、一九三〇年に対象地域を通過したヴェルナイ・ラン探検隊の写真記録を利用している⁽⁸⁾。このなかには、パンの水の量など環境史に使える情報も含まれている。筆者は、アフリカの環境史研究においては、文化人類学の方法を中心として、環境史と社会史との区別にとらわれずに使用可能なあらゆる方法を組み合わせることが不可欠であると考えている。

註

- (1) 拙稿2002『国家のなかの狩猟採集民』国立民族学博物館研究叢書4。
- (2) Solway, J.s. and R.B. Lee 1990 Foragers, genuine or spurious? : situating the Kalahari San in history. *Current Anthropology* 31 109-146. ほか多数。
- (3) 池谷和信編2003『地球環境問題の人類学』世界思想社。市川光雄2003『環境問題に対するecologyの生態学』池谷和信編『地球環境問題の人類学』世界思想社。
- (4) Carruthers J. 2002 Environmental history in southern Africa: an overview. 4 賦° Dovers, S., R. Edgecombe, B. Guest (eds.) 2002 South Africa's Environmental History : Case and Comparisons. Ohio University Press, David Philip Publishers.
- (5) 拙稿1997「イギリス植民地キプロスランドにおける毛皮と骨」*エスノメトリック*『社会人類学年報』23 29-53°
- (6) Kjekhus, H. 1977 Ecology Control and Economic Development in East African History: The Case of Tanganyika 1850-1950. London: Heinemann.
- (7) Vail, L. 1977 Ecology and history: the example of eastern Zambia. *Journal of Southern African Studies* 3(2): 129-155.
- (8) Anderson, D. 1984 Depression, dust bowl, demography and drought: the colonial state and soil conservation in East Africa during the 1930s°. *African Affairs* 83: 321-343.
- (9) Anderson D. and R. Grove eds. 1987 Conservation in Africa. Cambridge University Press.
- (10) Showers 1989 Soil erosion in the kingdom of Lesotho: origins and colonial response, 1830s-1950s. *Journal of Southern African Studies* 15(2) : 263-286.
- (11) Janzen, D 1998 Gardenification of wildland and the human footprint. *Science* 279 : 1312-1313.
- (12) Fairhead and Leach 1996 Leach, M. and R. Mearns (eds.) 1996 The Lie of the Land: Challenging Received Wisdom on the African Environment. The International African Institute.
- (13) Ichikawa, M. 2001 The forest world as a circulation system: the impacts of Mbuti habitation and subsistence activities on the forest environment. *African Study Monographs*, Suppl. 26: 157-168. 佐藤廉也2003「森林への人為的作用の解説」池谷和信編『地球環境問題の人類学』世界思想社。
- (14) Kratke, E. 1996 Recreating Eden: Agro-Ecological Change, Food Security and Environmental Diversity in Southern Angola and Northern Namibia, 1890-1960. unpublished Ph. D. thesis, Yale University.
- (15) Fairhead, J. and M. Leach 1996 Misreading the African Landscape: Society and Ecology in a Forest-Savanna Mosaic. Cambridge University Press.
- (16) Nyerges, A.E. 1996 Ethnography in the reconstruction of African land use histories: a Sierra Leone example. *Africa*

66(1):122-144.

- (1) Ichikawa 2001 注③参照
- (2) 佐藤2003 注②参照
- (3) Kreike 1996 注④参照
- (4) Beinart, W. 2000 African history and environmental history. African Affairs. 99:269-302.
- (5) Dovers, S., R. Edgecombe, B. Guest (eds.) 2002 South Africa's Environmental History: Case and Comparisons. Ohio University Press, David Philip Publishers.
- (6) Beinart, W. and J. McGregor (eds.) 2003 Social History and African Environments. James Currey, Ohio Univ., David Philip.
- (7) Ikeya, K. 1998 Interaction between San and Kgalagadi in the colonial era. The Proceedings of The Khoisan Identities and Cultural Heritage Conference. InfoSOURCE Cape Town.
- (8) Ikeya, K. 1999 The historical dynamics of the socioeconomic relationship between the nomadic San and the rural Kgalagadi. Botswana Notes and Records 31:19-32.
- (9) 筆者は、すでにカラハリ砂漠の一部の地域における地名の分布を報告している。地名は、降雨後に水のためる窪み内のくぼ地、半砂漠のなか林や特別な木、そして丘陵地に付与されていた。また、グウィとガナの生活史の語りに登場する膨大な数の地名は、民族誌を民族史へと架橋するうえで重要な手掛りになるだろうと指摘される(菅原和孝 1997『記憶装置としての名前』国立民族学博物館研究報告二二(一)‘八八頁)。

(26) 大崎雅一は、年代推定のキーとなる出来事として、アマンデベレの侵攻、赤バッタと茶色バッタの大発生、天然痘の流行、シルバーウアーによる調査、日本人による調査の5つを挙げている(大崎雅一 2001 セントラル・カラハリ年代記。田中二郎編『カラハリ狩猟採集民』京都大学出版会)。本稿での筆者の記述とは一部類似すると同時に大きな違いも認められる。両者の比較については、別稿で論じる予定である。

(27) 赤色バッタ (Red Locust) は、アフリカ全土とマダガスカルに分布し、最も主要な繁殖地はタンガニーカやローデシア北部などである。そして、翅をもつ成熟した成虫は四月から一二月までの九カ月間も生き続け、一二月までには産卵を終える。また、移動は有効な風を利用し、それに乗って行われる。群れの長さは三〇〜六〇四続き、幅は二〜八kmと記録されている。彼らは日中は食をとり、夜に飛行し続け、夜に入って食事をし眠る(坂口浩平編 1982『図説 世界の昆虫六』アフリカ編一』保育社)。

(28) B.N.A. (ギンナワ国立古文书館の資料ファイル) Med. 6/5

(29) Silberbauer 1972 The G/wi Bushmen. Bicchieri ed. Hunter and Gatherers Today. Rinhert and Winston. 三〇〇三頁。

(30) B.N.A. S563 1/2

(31) 拙稿2004『フッシュマンとカラハリ農牧民との交渉史』田中二郎ほか編『遊牧民—アフリカの原野に生きる』昭和堂。

【付記】 本稿は、平成一六年一月二四日の大阪歴史科学協議会例会における口頭発表の原稿の一部を基にしている。